



第二十号

## 「家元年賀式」

平成二十五年新年号。年が明けて間もない一月九日。

メルマガnoichi編集部一行は市谷左内町にある正派邦楽会館を訪れ、八十年以上前から脈々と続く『家元年賀式』の様子取材させて頂きました。

年末年始の過ごし方には日本各地、それぞれ独特の習慣が残るもの。地元ではお馴染みでも、外から見たらきっと目新しく映ります。

私どもにとっての『家元年賀式』もその一つの例かと思いました。家元年賀式の歴史や雰囲気、を少しでもお届け出来れば幸いです。

## 中島靖子家元挨拶

あけまして、おめでとうございます。今年は正派創始百周年に当たると念の年です。

こういう大きな節目の時に私が、そして皆さんがこのようにして一緒にいられることの縁を感じております。演奏会のある六月まで、それぞれがそれぞれの立場で、出来る準備をしっかりととして、皆が力を合わせた万全な状態で当日を迎えられるようにしてください。

今年もよろしくお願い致します。

## 乾杯の音頭 (水野雅楽齋関東支部長)

おめでとうございます。

正派創始百周年。今年は本当に頑張りましたよ！

それでは、乾杯の音頭をとらせていただきます。

それでは、皆さん、頑張りましたよ！乾杯。

一同…乾杯——！(拍手)

## 初代家元夫人に聞く年賀式(禮子)

雅楽之一…まず最初に、お話を伺ってもいいですか？



中島禮子…はい、どうぞ。

雅楽之一…年賀式の事をちよっとお伺いしたいんです。

昔、市ヶ谷にお住まいだった頃の年賀式の様子を。

禮子…はい。その頃は昔の道場ですね。

雅楽之一…内弟子さんたちと一緒に？

禮子…一緒でした。

雅楽之一…他にも？

禮子…そうですね、あの頃は内弟子さんが沢山いらしたから、色々手伝わってもらえたからね。わざわざ外から来るっていうと、お客様になるのかしらね。

雅楽之一…今日は(一月)九日です。その当時はもともと元旦に近い日にちだったっていう話を聞いたことがあるんですけど。

禮子…二日だったかな？二日か三日そんな感じだった。

雅楽之一…二日か三日。

禮子…他の人たちに聞いてみて。

雅楽之一…はい。他の人たちにも聞いてみます。

《中島禮子：初代家元夫人(後妻)。(公財)正派邦楽会理事。唯是巖一の姉にあたる》

## 元旦の翌日が…(家元 一子)

雅楽之一…一番古い、家元年賀式の記憶といますと、子供のころ？

中島靖子家元…それは子供のころですね。

雅楽之一…子供のころ。

家元…ええ。道場で。舞台の上に何か飾って。

雅楽之一…舞台の上に、今日も飾ってありますけど、こういう感じですか？

家元…ええ、そうですね。それと年賀式はとにかく人が来るので、父はとつても喜んでましたね。

雅楽之一…えっと。その当時は、新年のもっと早い日にな

さっていましたか？

靖子…もつと…はい。そういえばそうでした。

中島一子…私の記憶では一月二日でしたね。とにかく元旦の翌日が年賀式ってのが印象に深いです。

雅楽之一…元旦の翌日が年賀式。つまり年賀式は一月二日だったんですか。

一子…子供のころはね、お年玉がいっぱいもらえるから喜んで来ましたけど(笑)

雅楽之一…(笑)

一子…内弟子さんを取らなくなってからもずっと続いていたかしら。一月二日に年賀式っていう習慣がね。

《中島靖子：正派二代目家元、箏曲家、作曲家。(公財)正派邦楽会理事長》

《中島一子：正派副家元、地歌三弦演奏家。(公財)正派邦楽会理事》

## 内弟子も酔って(宮本)

宮本雅都貴…家元年賀式の思い出はね、私のはあんまり良くない(笑)

雅楽之一…なんですか！(笑)

宮本…というのはね。私たちは裏でお酒をお燗にするわけ。お弟子さん達が、それをお客さん達にお出しするの。

で、ホラ、お銚子ちゅうしが少し残ってくるでしょ、それが勿体無いかからああいふ屏風の影でね、飲んでたの(笑)そして、もうそこで寝たいくらいになって(笑)

雅楽之一…(笑)

宮本…当時は、自分がどのくらい飲めるかなんてわからなから、それでも残ってくるのが勿体無から、でまた新しくして持つて行つては戻つてきての繰り返しで。だから、みんな強くなったのは、そういう訳なのよ(笑)

雅楽之一…さて、そうなんですか(笑)

宮本…あの頃の年賀式は、今のこれの倍ぐらいテーブルが。

雅楽之一…お客様って例えばどなたですか？

宮本…十二月に試験を受けた人達とか。

雅楽之一…ああ、十二月に准師範試験を受けた人達ですね。ああ、そうだったんですね。

宮本…そう、それで終わったお弟子さんとか、あと幹部の先生方、それから田辺（尚雄）先生とか吉川（英史）先生とか、岸辺（成雄）先生とか。

雅楽之一…当時の正派音楽院の先生方ですね。

宮本…そうです。政治家の人達もおいでになりましたよね。

雅楽之一…へえ。

宮本…でも、いつも最後に残るのは田辺先生！

雅楽之一…そうですか（笑）それには何か理由があるんですか？

宮本…最後まで飲んでらっしゃる。

雅楽之一…飲んでらっしゃる（笑）

宮本…それでも、家元先生はこうやってお客様がいらつしやる時は袴をはいて、ドンと座ってらっしゃいました。で、お客様が少し切れると下に降りて、袴姿のまんま横になって休んでいらつしやいました。朝の九時にはもうお客様が見えてたものね。夜の九時頃まで。

雅楽之一…十二時間の長丁場ですね。

宮本…（小声で）田辺先生は、はじめっから終わりまで。

雅楽之一…クスクス。

《田辺尚雄一八八三〜一九八四。日本の音楽学者、文化功労者。宮城道雄、中島雅楽之都らとは親交が深かった》

《宮本雅都貴：本名幸子としても活動。箏曲家、（公財）正派邦楽会理事》

唯是震一に聞く（唯是、水野、家元）

唯是震一…田辺先生いらつしやってたね。だけど、ぐでんぐでんになつちやって。ねえ。

水野雅楽蓉…そうそう。そうでしたね。

雅楽之一…そうなんですか？

唯是…みんな「えつ、まだいるの？」とか言ってるね。

雅楽之一…（笑）

唯是…酔っぱらうと色々な話をして大変なんだけど、凄く立派だった。

水野…立派でしたよ。



唯是…頭脳が御立派なのね。ほんつとに物知りで。

水野…とにかく、家元とは仲が良かった。

雅楽之一…あ、家元と？

水野…そう。盟友でしたね。

唯是…玲琴なんていう、ご自身が考えた楽器を弾いて。

雅楽之一…確かここにも、あ、あそこにありますね。

唯是…そう。ちゃんと仲間に入って楽器を演奏してたんだから。

雅楽之一…へえ。

唯是…大したものでしたよ。

水野…病院に入院された時も病室を書斎のようにしてね。本がうず高く積んであつて。で、そこに家元先生は、しょつちゅう行かれてましたよ。

家元…毎月行っていたわね。

水野…私も何回かお供しました。

唯是…私の恩師が来た時もね、田辺先生は凄く喜んでね。

雅楽之一…恩師とは、ヘンリー・カウエル先生ですか？

唯是…はい、来たんですよ。田辺先生は普段は余り色々おつしやらない先生だったけど、その時ばかりは凄くべた褒めしてくれましたよ（笑）

雅楽之一…（笑）

水野…私ね、ヘンリー・カウエル先生っていうとね、思い出すのは、ここにお泊まりになった時のこと。

雅楽之一…ヘンリー・カウエル先生は、ここにお泊まりになつたんですか？

唯是…そうだった。

水野…そう。それでね、先生の恩師だつて言うから、私たちみんなも、本当に大変な先生がいらつしやったと思つてみんな慌ててましたけど。それでね、こういうことがあつたの。朝になって、カウエル先生がお発ちになる時にね、唯是先生がサツと玄関に降りて行ってしゃがみ込んで恩師の靴の紐を結んであげてるの。あの唯是先生がですよ、そ

んなこと今では考えられないでしょ!?

雅楽之一…そうだったんですか…。

水野…もう、唯是先生は怒りっぽくて怖かったけど。

雅楽之一…アハハ。

水野…今は本当に優しくなっちゃったでしょ(笑)ね、靖子先生?

家元…そうね(笑)

《唯是震一：作曲家、箏曲家（公財）正派邦楽会理事》

《水野雅楽蓉：音楽プロデューサー、（公財）正派邦楽会理事》

## 年賀式の習わし(家元、一子、宮本)

雅楽之一…何か必ずするという習わしというようなものはありましたか?

家元…昔はちゃんと頭(かしら)が来て、舞台をちゃんとやりましたね。

一子…あー、頭は私知らない。

雅楽之一…かしら?

家元…だから本当のそういうね、なんていうのかしら。

雅楽之一…つまり、十二月三十一日に飾り付けに来るんですか?

宮本…そう。それが終わると餅を突き直して、押し餅にして、持ってきてくれるの。

一子…式典が終わるとそれを突きなおして、押し餅にして、食べられるような押し餅にして持ってきてくれたのよ。

雅楽之一…のしもち、って何ですか?

一子…平たく伸ばしたそれを切った物。

雅楽之一…あー。

一子…押し餅を切った物が今パックになって売ってるのよ。

雅楽之一…あー、あれ押し餅って言うんですか。

一子…もともとは押し餅。

雅楽之一…あ、そうか。

宮本…お餅になったそれを外の桶の水の中に入れちゃって、水餅にしちゃう。

雅楽之一…水餅にしちゃう?

宮本…ひび割れたり、かびないために。

一子…昔は冷凍とかないから。

雅楽之一…へえ。



家元…そういうえば私は、母から受け継いだ小豆と栗の羊羹をずっと作ってたけど。この三、四年作らなくなったわ。

唯是…そうだね。靖子は本当に毎年作ってたね。

雅楽之一…なんですか?

一子…寒天と小豆を煮て、小豆を煮た中に寒天を入れて栗を入れてね。

雅楽之一…今で言う何ですか?

一子…まあ、水羊羹みたいなもの。寒天で作った。

雅楽之一…水羊羹か。

家元…ついこの前まで作ってたのよ。

雅楽之一…そうですか?なんで僕知らないんだろ。

家元…さとしは、ああいう甘い物が嫌いだからね。

雅楽之一…あ、そっか。

## 今は無き『お年取り』の習慣(角井、一子、家元、宮本)

雅楽之一…二、三ありませんか?屏風の裏でお酒を飲んだ

以外に(笑)

角井雅楽伎…屏風の裏…あったわね(笑)私が来たころは、もう前の音楽院が出来ていたので…楽院のホールで、今の洋間になっている所ですね、あそこに屏風を立てて、その陰でお燗したりお料理を準備したりさせて頂きました。

一子…三十一日が「お年取り」、一日はプライベートで過ごし、二日は年賀式で。一日だけは、皆さんにお会いしなければ、中一日空けてまた「明けましておめでとう」で皆さんそろって。

雅楽之一…先ほどのお話で二つ気になることが。十二月三十一日にみんなで集まっていたんですか?

家元…そうそう。

雅楽之一…「お年取り」と言うんですね。お年取りをやる習慣というのは、ずっと昔からですか?

家元…ずっと昔からです

宮本…一人一人、その人のお皿っていうのがあって、そこに魚やらなんやらものすごく豪華に。

角井…そうそう。むしろ元旦は残り物だったわね。

雅楽之一…はっ。元旦は残り物(笑)

宮本…残り物を戸棚に閉まつといて。

雅楽之一…お節料理を前の日大晦日に食べちゃうというも  
のだったのですか？

宮本…確か、東京から北の方は、三十一日に食べちゃつて  
たのよね。

雅楽之一…じゃあお蕎麦を食べる習慣はなかったんです  
か？

宮本…お蕎麦は食べてない。

角井…あの当時、お蕎麦は食べなかつたですね。

雅楽之一…そうなんですか！へえー。

宮本…三十一日にご馳走をいただきたいやう。

角井…とにかく、三十一日の夕方まではもう全部大掃除す  
るのね。それが済んで、紅白歌合戦を見て、そしてお年越  
し。ご馳走をいただいてね。とても食べきれなかつたの  
で、次の日食べましたね。

雅楽之一…お年取りで必ず食べていたものは？

一子…お年取りはお年取り用のご馳走があつたわね。なん  
だか色々あつたけれども…必ずあつたものって…

家元…鮭の粕煮ね。鮭を粕汁で煮るの。

雅楽之一…信州らしいですね。

家元…あれは母が信州だったからかしらね。

宮本…みんなで作りましたね。

角井…私の思い出も、鮭の粕煮。私は、関西人だから、初  
めていただいたの。

雅楽之一…鮭の粕煮。

角井…お年越しに、粕で塩鮭を煮るの。

雅楽之一…やっぱり、それは長野の習慣なんですかね？

角井…そうね、長野の。

雅楽之一…あー、そうなんですか。今度信州の方に聞いて  
みたいですね。

角井…北海道もそうなんですか？

宮本…そうですね。今も。

雅楽之一…今もですか。

《角井雅楽伎：箏曲家、(公財)正派邦楽会評議員》

**こんな風習も…(角井、宮本、一子、家元、禮子)**

角井…お正月は日本髪を結ってましたわね。

宮本…奥様もずっと長いことしてました。

一子…私が、小学校のころまでは、祖母は少なくとも日本  
髪だった。ピンツケ油の匂いがしてね。

雅楽之一…ピンツケ油の？

家元…この辺に芸者さんの頭を結っている人がいてね。高  
下駄をはいて、女の方が白い着物を着るのよ。

雅楽之一…高下駄をはいて、白い着物で。なんだか神秘的  
ですね。

一子…私、一回だけやったことがある。

宮本…私も、一回だけね(笑)

禮子…あの髪を結ってもらうの、痛いよね。

雅楽之一…ピンツケ油で結うのって痛いんですか？

禮子…それがね！ビーンって引っ張って、固まったものをシ  
ューっと付けるから痛い。

一子…松脂みたいなものなのよ(笑)

禮子…覚悟してからでないと、行かれなかつたわ。

雅楽之一…へえ。

**手ぶらで気楽に年賀式**

家元…でも、色々ありましたけど、もう今は時代が変わつ  
て、お茶とする年賀式でしょ？(笑) だから、お菓子一つ

でもつまんで帰るくらいで、いいじゃない？だから、こ  
の年賀式を大変なもの、行きにくいものと思わないで、お  
茶飲んでお煎餅一つつまんで。もうちょっと気楽に来てほ  
しいと思つてます。何か持っていかなきゃ、とか色々思  
わないでね。

雅楽之一…手ぶらでどうぞぞ。

家元…そうそう。



雅楽之一…副家元は、何か会員に一言ございますか？

一子先生…演奏会とか講習会とかそういう機会ではなく、家元に会いに行ける機会がなかなかないと思うんですね。だからそういった意味で、本当に年賀式は誰が来てもいいんです。例えば昇格者じゃなきゃいけないとか、そんなこともないし、お子さん連れでも構いませんし。昔はもつとお子さん連れの方が沢山みえて、ここにお年玉を用意しておいたりしたのね。だから、いろんな方々にとつて、直接家元の顔をみる絶好の機会だつてというような気持ちで来



ていただけるといいなと思います。本当に手ぶらでということ。気楽にいらしてください。

雅楽之一…はい。会員の気持ちを思いますと、なかなか気楽についでいうのも難しいかもしれませんが(笑)、そのくらいのもりでお出掛け下さるといいですね。

家元…お茶だから(笑)

一同…(笑)

### 《最後の挨拶》

中島一子副家元…半世紀前、つまり五十周年の時からいらした先生方と、学生の中には若いまだ高校を出て音楽院に入った方たちもいるわけで、一緒にこの百周年、祝えるというこの幅の広さ、これも正派の魅力ではないかと思えます。ですから百周年が終わつた後は、次の時代のことを私たちも考えていかなくてははいけません、今はとにかく百周年に向けて心一つにし、力を結集して、笑顔で演奏会に臨めるようにしていきたいと思えます。ご協力よろしくお願ひ致します。今日は、本当にお集まり頂きまして、どうも有り難うございました。(拍手)



Illustration: morimoe

### ◎あとかぎ◎

お正月が軽くなつてしまったのは、いつの頃からだろう。昔の年末はとにかく忙しかった。大掃除して、山にウラジオ(正月飾りの下に敷くシダの葉)を採りに行つて(僕の担当でした)年越し蕎麦を食べて、レコード大賞を観て、紅白歌合戦を観て、ゆく年くる年を観ながら除夜の鐘を聞いて、そのまま初詣。年を越したら、おせちを食べ、凧をあげて、コマを回して、お年玉をもらうために好きじゃない親戚にもあいさつをした。昔のお正月は厳粛な中にも、わくわくするような楽しい雰囲気になっていた。

最近の若い人は年末に蕎麦を食べないとか、おせちを食べない人も増えている。近所からの苦情で除夜の鐘をやめましたなんていうお寺もあるそうだ。昔のような年末年始の儀式には、新しい年を新たな気持ちで迎えるという心理的な効果があった気がする。だから去年の苦勞も持ち越さなくて済む。そのせいかどうか分からないが、日本人は過去を忘れやすいと言われる。過去を忘れやすいのは問題もあるかもしれないが、年末にリセットして明るい気持ちで一年を始めるのもなかなかいいものだ。

グラフィックデザイナー (http://www.1338.jp) みやはらたかお